

(手話通訳学科) 入学試験問題

国 語

試験 時 間

九：三〇～一〇：三〇

(注 意)

- 一 係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないで下さい。
- 二 問題は二頁く十六頁に印刷されています。
- 三 解答用紙に氏名、受験番号及び受験科目名を記入して下さい。
- 四 解答方法は次のとおりです。

例 問一 埼玉県の県庁所在地として、正しいのはどれか。解答番号は

1

① 前橋市 ② 甲府市 ③ さいたま市 ④ 横浜市 ⑤ 千葉市  
問一の正答は「③ さいたま市」ですから解答用紙の解答番号1の横に並んでいるマーク欄の中の「③」を鉛筆またはシャープペンシルで「●」のように塗りつぶして下さい。

- 五 机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計(計算機能のついていないものに限る)、受験票以外は置かないで下さい。
- 六 受験票は番号札の手前に置いて下さい。
- 七 マスクを着用している者は、試験官が本人を確認する間、マスクを外して下さい。
- 八 ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。
- 九 試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなった者は静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。
- 十 試験問題に関する質問は一切受け付けません。
- 十一 途中で退室する者は、解答用紙を机の上に置き、静かに挙手をして、係員の指示に従って退出して下さい。ただし、試験開始後三〇分間及び試験終了前一〇分間の退出は認められません。

十二 試験終了後、試験問題は持ち帰って結構です。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本列島に農耕文化（稲作）が渡来する以前の時代は縄文時代と呼ばれているが、縄文時代は典型的な森林文化の時代だった。その縄文時代の長い自然との共存を支えてきたものは、共生圏の存在である。a、その共生圏とは具体的にはどのようなものだったのか。

その中心は、雑木林と焼畑<sup>やきはた</sup>であった。雑木林とは、落葉広葉樹の中・小径木からなる林である。雑木林の名が示すように、雑多な樹種からなっている林であるが、クヌギ、コナラ、ミズナラ、クリ、カシワなど落葉性の<sup>な</sup>樹（オーク）類が中心になっていることが特色である。

雑木林は、地域ごとに樹種構成に違いはあるものの、九州から北海道に至る日本各地の集落周辺の、いわゆる里山と呼ばれる地帯に広く分布してきた。b、森林植物帯の上から見ると、日本列島の中部以西の地域はシイ、カシなどの常緑広葉樹からなる照葉樹林帯に入っている。ところがこうした地域でも集落の周辺には落葉広葉樹の雑木林が古くからあった。それはなぜなのか。

守山弘によれば、それは縄文人たちによる古くからの焼畑の営みに関わっている。焼畑は、森林を伐開して焼き払い、そこに雑穀を育てる森林文化特有の小規模な食物栽培技術である。一度に焼き払われる面積は、一般的には三反（九〇〇坪）以下だったと見られており、栽培される作物は蕎麦<sup>そば</sup>、稗<sup>ひえ</sup>、粟<sup>あわ</sup>、豆類などであった。そしてこれらを数年間順繰りにつくった後、焼畑は放置される。するとそのあとには、伐採や焼き払いに耐えて生き残っていた樹木の切り株から<sup>ア</sup>ホウガが伸びだして、落葉広葉樹の二次林が再生する。これが雑木林である。

こうして再生した雑木林は、火入れに強くホウガ更新力の旺盛な落葉性のオーク類が中心のものになる。そのオーク類は、燃料として火力が強く、用材としても丈夫であり、さらに食用になる実（どんぐり）をならせる樹木である。こうして雑木林は燃料、器具材、木の実、さらに山菜などを供給するきわめて利用価値の高い林になった。

しかしこの雑木林は、やがて三〇年前後で伐採・焼き払いされて再び焼畑になる。この循環が後氷期の早期以来、一万年以上にわたって日本列島では繰り返されてきた。そのため、その後の温暖化の進行とともに北上してきた<sup>A</sup>常緑広葉樹は、この周期的な伐採・焼き払いによって雑木林への進入を阻まれ、西日本の雑木林は常緑広葉樹林帯の中に残された後氷期早期の落葉広葉樹林のいわばレリック（遺存物）として集落の周辺に残り、一貫して人間の生活を支え続けてきたのである。

縄文時代における一万年にわたる森林と人間の共存は、このように焼畑とさまざまな

林齢の雑木林が周期的に循環しているという、里山の共生圏の存在によって支えられてきたのである。

森林と人間との長い共存関係という点では、ユーラシア大陸の西の森林地帯であるヨーロッパも基本的に同じだったとみてよい。人々は狩猟に依存する一方で、集落の周辺に広葉樹主体の生活林を持ち、そこからの資源を利用しながら森林との共存を長く続けてきた。

しかし、やがてユーラシア大陸の東西の森林地帯であるヨーロッパと日本列島のどちらにも、乾燥地帯起源の農耕文化が入って来た。ヨーロッパへの麦作と日本列島への米作の渡来である。だがその受け入れ方には、両者の間に大きな違いがあった。

稲作の発祥地は、佐々木高明らが「東亜半月弧」と名づけた長江流域の雲南・アッサム地方と見られているが、これが最初に日本に伝来したのは今からおよそ二四〇〇年前にさかのぼるとされている。当初は陸稲または陸稲と水稲の未分化の段階のものであったと言われているが、間もなく中心となったのは水稲だった。西日本の照葉樹林帯にまず定着したとされる水稲栽培は、その後急速に東進して、日本列島の歴史は縄文時代から弥生時代に移行する。

だが、日本列島に渡来した米作を中心とする農耕文化は、森林文化を駆逐してそれに入れ替わったのではない。それは、一つには日本で始められた水稲栽培が、主として山麓につくられた田圃たんぼに溪流の水を引き込む「棚田」から発達し、大規模な山林の伐開を引き起こさなかったことによる。また、乾燥地帯の農業ではつねに穀物栽培とセットをなして広まった牧畜を、稲作はともなわなかった。そのため、放牧のための広大な森林の伐開も行われなかったのである。

こうして、日本列島への米作の渡来は、伝統的な雑木林の消滅を起さなかった。それだけでない。雑木林にはその下草を「緑肥」として水田に供給するという、新たな重要な役割が加わった。日本列島への農耕文化の進出は、在来の森林文化の駆逐ではなく、それとの融合という形で進められたのである。それは、雑木林と並ぶ森林文化の遺産とも言うべき焼畑の営みが、戦後の昭和二〇年代まで全国各地で続けられていたことが物語っている。

こうした森林文化と農耕文化の融合は、里山一帯に、より多様な環境構造をつくり出した。焼畑と雑木林の世界に水田、畑、桑畑さらに水路や溜め池などが加わったのである。このことは、集落の周辺一帯に本来の自然にはない生物相をつくるものになった。森林性の種類に加えて草原性、湿原性、水性などの種類が定着するようになったからだ。人がつくった生物多様性と言っている。

古くから日本人の心に馴染んでいる「花鳥風月」の語は、自然と人の営みが四季の推移とともに織りなす田園の情景を表わす言葉である。中緯度の季節風地帯に位置する日本列島は、鮮明な四季を持っている。だが、それをもたらすのは「風月」すなわち気候の周期だけではない。さらに大きな要素は、「花鳥」すなわち動植物と人の季節ごとの営みである。

古くから詩歌に登場する動植物は、じつに<sup>(1)</sup>「タサイ」である。だがそれらは、たとえば鳥をとつてみても、ウグイス、ヒバリ、クイナ、ガンなど、どれも田園地帯にごく普通に見られてきたものばかりである。しかもそれには森林、草原、湿原、沼などに棲むものが含まれている。

このことは、遠い万葉の昔から日本人の精神的風土の基盤をなしてきたといっている花鳥風月の世界が、Iであることを示しているといってもよいだろう。しかも、それは遠い昔のことではない。昭和初期に生まれた私などの子ども時代にも、まだ日本中に見られた世界だった。

里山一帯にこのような環境構造と生物相の多様性を生み出した根底にあったのは、縄文時代からの伝統として受け継がれた、森林文化特有の自然への順応の精神だった。自然を大きく変えることなく、地域と場所の特性に合わせた集約的な土地利用の上に、農耕文化と森林文化の融合が成り立っていたのである。

一方、ヨーロッパに持ち込まれた農耕文化が辿った道は、これとはまったく違うものだった。後氷期初頭の、今から約二万二〇〇〇年前のヤンガードリアス期に、「西亜半月弧」地帯のイラク北部のザグロス地方に始まったとされる麦作は、その後メソポタミアからギリシャ、ローマを含む地中海を取り巻く地域へと広まり、ローマ帝国衰退後の五世紀頃から、キリスト教勢力によってヨーロッパの内陸部に持ち込まれた。

ア さらにもう一つの違いは、キリスト教という強烈な一神教を背負っていたことだった。イ それ以後ヨーロッパ全土に広まっていった麦作は、日本列島に伝来した稲作の場合と二つの点で違っていた。  
ウ キリスト教では、人間は神のもとで地上のすべてを支配すべき者として位置づけられている。

エ その第一の点は、乾燥地帯起源の農業の流れを引く形で、牧畜とのセットで持ち込まれたことである。

つまりヨーロッパにおける農耕文化の拡大は、大規模に森林を伐り開くことを前提とする麦と羊のセットの形で、また在来の自然に順応するのではなく、これを征服し、改変する思想に支えられて始められたのである。

その結果、ヨーロッパの森林は急速に消滅して農耕地と放牧地に変えられ、それにもなつて長く森林と共存してきた在来の森林文化も駆逐されることになった。ヨーロッパでは、

## II

発展したのである。

その結果、一三世紀にはヨーロッパ西部の肥沃な地域ではすでに森林が一掃され、さらに一八世紀頃になると、ヨーロッパの九五%を覆っていた森林は二〇%程度になつてしまつていたとされている。このように中世を通じて農耕文化による森林文化の塗り替えが進んだヨーロッパで、やがて一八世紀の後半になつて産業革命の幕が切つて落とされた。

これによつて起こつたのは、急激に拡大した工業生産活動が都市に集中したことによる近代都市の発展と、この都市を拠点とするかつてない大量生産と大量消費のシステムの誕生である。

しかし、こうしてヨーロッパに起こつた近代文明のその後の発展を資源の面で支えたのは、ヨーロッパの自然ではなかった。海外貿易と植民地からの海外資源である。これらは一五世紀に始まり、一六世紀から一七世紀にかけてのスペイン、ポルトガルによるラテンアメリカの征服、イギリス、フランスなどによる北米大陸の征服などを経て、一八世紀以降はアジア諸国にも競つて貿易と植民地づくりの手が伸ばされてきた。

それは世界各地の資源を近代文明社会に吸い上げるとともに、地域在来の自然と文化をヨーロッパ起源の近代文明社会の傘の下に組み込み、塗り変えるものだった。かつて古代文明を築いた、麦と羊をセツトにした乾燥地帯の農業がそのままのスタイルでヨーロッパの森林地帯に持ち込まれて在来の自然と文化を駆逐し、そこに成立した近代文明の経済機構が世界の自然を収奪の対象にするようになったのである。二〇世紀以降、地球上の各地に残つていた自然との共存の文化は急速に駆逐され、共存の拠点だった。共生圏は消滅し続けている。

\*本文は一部原典の文章を省略している箇所がある。

(出典 石城謙吉『森林と人間―ある都市近郊林の物語』より)

問一 傍線部(ア)と(イ)の漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 、

(ア) ホウガ

- ① 山がモエギ色となった
- ② 大志をイタク
- ③ 山のミネが連なる
- ④ 信頼関係がクズれた
- ⑤ 犬を鎖から解き八ナツ

(イ) タサイ

- ① 最新のエンジンをトウサイする
- ② サイシンの注意を払う
- ③ 最近の作品はセイサイを欠く
- ④ サイマツの大売り出し
- ⑤ 納品をサイソクする

問二 傍線部(ウ)の意味として正しいものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

(ウ) 幕が切つて落とされた

- ① 開始された
- ② 終わりを迎えた
- ③ 終わらされた
- ④ 役目が終了した
- ⑤ 価値が下がってしまった

問三

空欄 a、

b

に入る語句として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は

4、

5

a

4

① だから

② たとえば

③ しかし

④ だが

⑤ では

b

5

① だから

② しかし

③ すなわち

④ やはり

⑤ そして

問四

空欄

I

と

II

に入る文章として最も  
適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

6、

7

I

6

① 森林文化が農耕文化を駆逐してもたらしたもの

② 農耕文化が森林文化を駆逐してもたらしたもの

③ 森林文化と農耕文化の融合した、共生圏の豊かさがもたらしたもの

④ 花鳥風月を重んじる日本人の精神風土がもたらしたもの

⑤ 雑木林と焼畑の融合によって形成された多様性がもたらしたもの

II

7

① 麦作の拡大は植民地から収奪された資源を用いて

② 放牧を中心とする森林文化が農耕文化を駆逐して

③ 森林文化と農耕文化の融合した、共生圏の豊かさを背景に

④ 農耕文化は森林文化と融合したのではなく、森林文化を駆逐して

⑤ 工業生産活動が行われるようになり、都市が

問五 の中の「ア」の文章を、文意が通るように並べ替えたとき、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は  8

- ① アーイーエーウ
- ② イーエーアーウ
- ③ イーエーウーア
- ④ ウーエーイーア
- ⑤ エーウーイーア

問六 傍線部A「常緑広葉樹林は、この周期的な伐採・焼き払いによつて雑木林への進入を阻まれ」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は  9

- ① 焼畑が放置された後には、火入れに強くホウガ更新力の旺盛なオーク類を中心とする落葉広葉樹が生成するから。
- ② 常緑広葉樹は、焼畑が行われることで、周囲を火に囲まれ、種子を広範囲に飛ばすことができなかつたから。
- ③ 日本列島の中部以西の地域では、気候や風土が常緑広葉樹の生成に適していなかつたから。
- ④ 森林を伐開して焼き払った後の焼畑には、燃料として火力が強く、食用になる実（どんぐり）をならせる広葉落葉樹が植えられたから。
- ⑤ 常緑広葉樹は、縄文時代の人々にとっては、利用価値が少なかつたため、定期的に焼かれていたから。

問七 傍線部B「日本列島に渡来した米作を中心とする農耕文化は、森林文化を駆逐してそれに入れ替わつたのではない」とあるが、その理由はなにか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は  10

- ① 水稻栽培は、麦作とは違って、広い土地を必要としなかつたから。
- ② 水稻栽培は、水利のよい低地で行われ、森林伐開を必要としなかつたから。
- ③ 生物多様性の重要性が古くから認識されていたから。
- ④ 縄文文化からの伝統として自然への順応の精神が受け継がれたから。
- ⑤ 在来の自然に順応するのではなく、それを征服する思想があつたから。

問八 傍線部C「共生圏」とあるが、これは本文ではどのようなものであると説明されているか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。

解答番号は 11

- ① 焼畑の拡大によって、年々減少している雑木林。
- ② 麦と羊の牧畜とをセットにしたヨーロッパの農業地域。
- ③ 水稲栽培を中心とするアジアの農村地帯。
- ④ 日本の精神的風土の基盤となってきた「花鳥風月」の世界。
- ⑤ 自然を大きく変えることなく、集約的な土地利用を行っている里山。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

まず重要なのは、国家とは、ともすれば想定されているように、私たちの「外側」にあるのではなく、私たちの「内側」に「実在」するものだとということである。国家のフィクション性を説く論者の多くが思い至らねばならなかったのは、まずこの点であった。にもかかわらず、それを「外側」にあるかのように考え、国家が「フィクション」であると宣言さえすれば、芝居の書き割りのように何の<sup>(7)</sup>造作もなく破り捨てられるように考えた点に誤りがあったのである。

それでは、国家はどのように「実在」するのであろうか。それはたとえば、きわめて日常的に起こりうる次のような事例においてである。ある日、帰宅すると家が荒らされて、現金はじめ貴重品が盗まれている。そこで、直ちに警察に通報する。警官がやってくる。調べが始まる。事情が聴かれる。それを取り囲む人々も、警察が早く犯人を捕まえることを期待する。ほとんど大多数の日本人は、こうした一連の出来事が生じることが当然のことと受け止めているであろう。国家とは、まさしく、そうした一連の過程を生じさせる人々の心のなかに実在する。要するに、国家とは、まず何よりも、ある事態や問題を前にして、人々が当然の如く互いに期待し、さらには承認しているところの、自分も含めた複数の人々の行動の仕組みのひとつである。

こうした行動の仕組みとは、言葉を換えて言えば、まさしく「制度」と称されるものである。むろん、こうした人々の期待と承認のうえに築かれた行動の仕組み⇨制度は、社会における家族や会社、学校その他の様々な場において、それぞれの仕方で多様なものが存在している。日常生活の多くは、こうした制度をもとに営まれている。制度がなければ、私たちは、次の瞬間、自分の周辺で何が起きるか、その都度予測しながら行動しなければならぬ。

といって、制度があるということは、単に合理的な予測が可能な状態を指すわけではない。空が暗くなり、雲が厚く垂れ込めると、やがて雨が降ることを私たちは予測するけれども、曇りの後に雨が降ることを制度とは呼ばない。また、経済情勢が悪化すれば犯罪が増加するが、それを制度とは呼ばない。a、制度とは、単に事実として繰り返される現象のことではない。そこには、純粹な予測という以上に、そうした繰り返し起こる事態についての規範的な予期と肯定がなければならぬ。すなわち、そうした出来事が、起きねばならないという期待と、起こるべきことが起きたという承認である。

学校で教師が毎日授業をすることに對しては、まさにそうでなければならぬという生徒の側の期待と承認がある。また、教師の側からは、生徒に對して、授業を聴く、あるいは、少なくとも、そのようなふりをするという期待と承認が向けられる。しかも、そこには、互いの期待と承認を双方が認知しているという構造がある。そうした期待や

承認が成立せず、互いに、相手方の素振りや雰囲気から、ちゃんと授業をするだろうか、あるいは、授業を聴くだろうかという<sup>A</sup>純粹の予測に依存せざるをえなくなれば、本来の意味での学校という制度は崩壊している。<sup>(1)</sup> 往々にして錯覚されるけれども、教室や校舎と呼ばれる建物があるからといって、それ自体は学校ではないからである。制度が成り立っているのは、何よりも、お互いの行動についての期待や承認が人々の間に確固として抱かれていくからに他ならない。

ところで、制度には様々なものがあるが、さしあたり国家とは、そのなかでも、法という裏付けを伴い、さらに、それをもとにした政府をはじめ統治機関の活動が一定の役割を果たしているような制度の集合であると言つてよい。法は社会の様々な制度への欲求を反映しながら国会で立法され、そうした様々な法を究極的に基礎づける法として憲法がある。法が裏付けとなるとするのは、言うまでもなく、それが政府や統治機関による強制力を伴っているからである。そのため、国家と総称される諸制度は、それだけ、人々の期待や承認がかなりな確実性をもって満たされる可能性が高い。b、制度に違反した者や逸脱した者には、さまざまな制裁が伴うがゆえに、その制度の実現が担保され、国家の制度への人々の期待と承認をより一層確かなものにするのである。

ちなみに、国家の諸制度のうちでも最も基本的なもの、言い換えれば、ある地域に国家なるものが成立しているか否かということを示す<sup>ちようひょう</sup>徴表となる制度は、ある一定の地域の治安を維持するための制度であろう。とりわけ、近代世界においては、こうした治安の維持の制度がどの程度に確立しているかが、その地域の国家の成立の程度を決定すると言つてよい。

ここから、国家とは、正当な暴力を独占した政府のもとに組織された団体であるとするM・ウェーバーの古典的な国家の定義が成立する。「正当な暴力」という表現には、<sup>(ウ)</sup>ややもすれば誤解を招く面があるが、先に引いた警察の例は、国家と総称される制度の典型的な例となる。犯罪の発生に関して、人々の間の警察の行動への期待と承認がほとんど無意識のうちに前提とされるほどに強固なものになっており、こうした確固たる期待と承認が私たちの心のうちにあることを、国家が私たちの内側に「実在」するといふのである。そうした期待や承認がなくなれば国会議事堂はただのコンクリートの固まりであるし、憲法典も単なる紙切れに過ぎず、警察官も単なる武装した男たちに過ぎない。その意味で国家は、ひとえにIに根拠を持つ「フィクション」に他ならない。

\*本文は一部原典の文章を省略している箇所がある。

(出典 坂本多加雄『国家学のすすめ』より)

問一 傍線部(ア)～(ウ)の語句の意味を、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ  
選びなさい。解答番号は 12 ～ 14

(ア) 造作もなく

- ① たいした労力や時間をかけずに
- ② 何事も生み出すことなく
- ③ 目的をもたずに
- ④ 人に迷惑をかけることなく
- ⑤ 形を残すことなく

(イ) 往々にして

- ① 滅多にない様子
- ② とぎどぎ
- ③ 昔から
- ④ 必然的におこるさま
- ⑤ よくありがちなさま

(ウ) ややもすれば

- ① 悪意をもって捉えれば
- ② 成り行きに任せておくとそうなりがちなさま
- ③ 経験に照らして考えると
- ④ うっかり間違えて理解をしているさま
- ⑤ きちんと説明をしないと

問二 空欄 a、b に入る語句として、最も適切なものを、次の①～⑤のうちか  
ら一つ選びなさい。なお、a、b には同じ語句が入る。解答番号は 15

- ① しかし
- ② すなわち
- ③ だから
- ④ そして
- ⑤ たとえば

問三 傍線部A「純粹の予測に依存せざるをえなくなれば、本来の意味での学校という制度は崩壊している」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16

- ① 教師が授業をすれば、生徒が授業を聴くという合理的な予測が可能な状態こそが学校の制度であるから。
- ② 教師が授業をする一方で、生徒が授業を聴くという事実が繰り返されることが教育の制度であるから。
- ③ 次の瞬間、自分の周辺で何が起きるか、その都度予測しながら行動することは、学習環境の悪化を意味するから。
- ④ 制度とは繰り返し起こる事態に対して、起きなければならぬという期待と、起こるべきことが起きたという承認によって成立しているから。
- ⑤ 純粹の予測に依存せざるをえなくなれば、学校の制度を担保している制裁としての校則が機能しなくなるから。

問四 空欄 I に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17

- ① 正当な暴力を独占した政府
- ② 私たちの「外側」
- ③ 私たちの心の中Ⅱ「内側」
- ④ 様々な法を究極的に基礎づける憲法
- ⑤ 治安を維持するための制度

問五 本文の内容に合致するものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18

- ① 国家のフィクション性を説く論者は、国家は「内側」にあると考えている。
- ② 国家とは、一連の出来事に対して、合理的な予測が可能な状態にある場合に成立する。
- ③ 政府をはじめ統治機関の活動が一定の役割を果たしている制度の集合が国家であり、憲法があれば国家であるといえる。
- ④ 法の裏付けのある国家は、人々の期待や承認がかなり確実性をもって満たされる可能性が高い。
- ⑤ 近代世界において、武装した警察官がいなくては、国家とは言えない。

第三問 次の問いに答えよ。

問一 次の四字熟語のなかで、正しい漢字の使い方をしているものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 19

- ① 油断大滴
- ② 粉骨碎身
- ③ 品行方正
- ④ 暴因暴食
- ⑤ 千狭万別

問二 次の傍線部のカタカナを正しい漢字に直したものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20

- ① 彼女のスカートには、花のモヨウ（模用）が描かれていた。
- ② 昨年のことを思えばカクダン（各段）に進歩している。
- ③ 今は一人にしておいて欲しいことをサツチ（刷知）して欲しい。
- ④ 花が咲いて散っていくのは、自然のセツリ（説理）だ。
- ⑤ 伝染病にかかってしまったので、カクリ（隔離）された。

問三 次の傍線部のカタカナを正しい漢字に直したものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21

- ① 彼の偉業は、長らく歴史の中にウ（葬）もれていた。
- ② お互いが良いライバルとして、キソ（争）い合いながら上達した。
- ③ チームのメンバーは、全員一致で彼女をリーダーにオ（推）した。
- ④ 経理を担当する社員が辞めてしまったので、事務がトドコオ（留）っている。
- ⑤ 昨日は、友達をサソ（招）い、映画を見に行った。

問四 全て正しい漢字を用いている文章として正しいものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22

- ① 最高裁判所は、偉憲であるとの訴えを棄却した。
- ② 書籍や映画、放走で表現される内容を公権力が検閲することは禁止されている。
- ③ 無中になって読んでいた本を車内に忘れて、遺失物センターに取りに行った。
- ④ 最寄駅で降りた後、自己啓発のために行っている英会話スクールに行った。
- ⑤ 気弱な性格の彼も、彼女の前では虚成を張っている。

問五 次の傍線部の漢字の読みが正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 23

- ① 大使を本国に召還(しょうかん)した。
- ② 彼は機知(きび)に富んでいる。
- ③ 驚きの喚声(きせい)があがった。
- ④ あれこれと難癖(なんへき)をつける。
- ⑤ クーデタは未遂(みつい)に終わった。

問六 次の傍線部の漢字の読みが正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 24

- ① 学生時代に君とけんかをしたことを克明(かつめい)に覚えている。
- ② そんなに大層な代物(だいぶつ)ではない。
- ③ 手術で傷口を縫合(せいごう)した。
- ④ 潤沢(じゆんたく)な資金をもとに、起業した。
- ⑤ 法律は、遵守(そんしゆ)しなければならない。

問七 次の傍線部の漢字の読みが正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 25

- ① 生兵法(きへいほう)は大げがのもとだ。
- ② 彼女はその事については門外漢(もんげかん)だった。
- ③ 居丈高(いたけだか)にものを言う。
- ④ そのような形而上(けいじじょう)の論争をしても意味がない。
- ⑤ 彼の破天荒(はてんぎょう)な冒険譚に聞き入った。

問八 次の傍線部の漢字の読みが正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 26

- ① すんでのところまで死を免(まのが)れた。
- ② 食べ物の好みが偏(かぶ)る。
- ③ 次々と流行は廃(すてら)れていく。
- ④ 祭りへの参加を促(うなが)す。
- ⑤ 故人を悼(なつかし)む。

問九 「経験を積んだ結果、態度や物腰などがその職業や地位などにふさわしくなること」との意味がある慣用句として正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 27

- ① 板に付く
- ② 一目置く
- ③ 意にかなう
- ④ 口に合う
- ⑤ 尻馬に乗る

問十 「何度も同じことを言われてうんざりしている様子」を表している慣用句として正しいのはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 28

- ① 歯が浮く
- ② 色を失う
- ③ 耳にたこができる
- ④ 寝耳に水
- ⑤ お茶を濁す

問十一 次のことわざとその意味が正しい組合せはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 29

- ① 怪我の功名 ……上手な人でも失敗することがある
- ② 白羽の矢が立つ ……月日の経つのが早いこと
- ③ 紺屋の白袴 ……大事のためには他の不都合はやむを得ないこと
- ④ 藪をつついて蛇を出す ……不運に不運が重なること
- ⑤ 良薬口に苦し ……身のためになるような忠告は聞きづらいということ

問十二 次の傍線部の四字熟語の使い方として正しいものはどれか。次の①～⑤のうちから1つ選びなさい。解答番号は 30

- ① 敵の「一喜一憂」に注目して隙を狙った。
- ② 「一期一会」と心得て、人との出会いを大切にしましょう。
- ③ どの意見も「一進一退」で、大差がない。
- ④ ここまできたら、君とは「一挙兩得」だ。
- ⑤ 彼女は子どものように「海千山千」に振舞う。

児童指導員科-手話通訳科 一次募集国語 正答

問題番号		正答
第1問	1	1
	2	3
	3	1
	4	5
	5	2
	6	3
	7	4
	8	2
	9	1
	10	4
	11	5
第2問	12	1
	13	5
	14	2
	15	2
	16	4
	17	3
	18	4
第3問	19	2
	20	5
	21	3
	22	4
	23	1
	24	4
	25	3
	26	4
	27	1
	28	3
	29	5
	30	2